第52回定期中央委員会

主催者あいさつ（要旨）

中央執行委員長　加藤　誠

「新たな施策」に対し、是々非々で向き合ってきた

1月28日、会社から安全衛生委員会の単位を「166事業場」とする修正回答がありました。提案時は「293事業場を36事業場とする」とされ、安全衛生委員会が大幅に集約される内容でした。また、JR東労組の12地本に相対する労使間協議の設置単位については、変更点はあるものの基本的に現行の12の交渉単位等を維持する修正回答を引き出しました。

昨年5月の提案以降「組織再編」「新人事・賃金制度」の新たな施策に対し、私たちは「定期昇給を軸とした新たな格差と分断、不利益変更反対！安全・健康・生活を守るため、全組合員でたたかおう！」のスローガンを掲げてきました。団体交渉は是々非々のスタンスで粘り強く議論しましたが、その真髄は「職場現実」に基づき、組織議論と労使議論を積み上げたことです。そして、JR総連の協力のもと、国会議員等との意見交換の場が実現し、アドバイスを生かすことができました。

私たちは「提案されたら変わらない」「組織が小さくなったから変わらないなどの諦め感を払拭して「ダメな事にはダメ」と立ち向かってきました。その中でJR東労組の必要性を呼びかけ、組織拡大を成し遂げたことが教訓です。

新たな人事・賃金制度に踏まえ、2026JR総連春闘をたたかおう！

2026JR総連春闘はこれらの教訓をもとに、統一要求・統一闘争のもと、組合員と家族の生活向上と要求満額獲得に向けてたたかいます。

JR東労組は、能力昇給に一貫して反対してきましたが、会社は能力昇給の導入を頑なに変えず、対立しました。その上、本社から「新賃金・夏季手当について」の通知を受けました。その中に「全社員の職務能力給を1万円以上増額しベースが引き上がること、また他の手当等の平均支給額も大幅に増額となることを踏まえ検討していく」「新賃金と夏季手当を併せて具体的な要求の提示をお願いしたい」という内容であり、まさに「ベアは出さない」と言わんばかりではないでしょうか。

従って、4月からの新たな人事・賃金制度に踏まえた春闘の要求づくりを行ってきました。ベースアップは、組合員の生活実感や労働実感に踏まえ、「統一ベア要求1万8千円」とします。そして〝現行の定期昇給額の水準を維持した昇給〟を求めます。また、夏季手当は「役割遂行賃金の3・2ヶ月」、新制度での減額分として一律5万円を加算することを要求します。

新制度では「定期昇給」が「能力昇給」へと変更され、昇給額は「評価」によって区分1～6に分けられます。消費者物価指数を加味すると能力昇給だけでは生活が苦しくなることから、賃金の底上げである「ベア」の実現が何よりも重要となります。

また、期末手当の算出基礎が、扶養手当などを含む「基準内賃金」から、子ども手当などを含まない「役割遂行賃金」に変更される課題や、夏季手当と新賃金の同時期議論に関する課題もあります。それらを明確にし、2026JR総連春闘をたたかいます。

安全再確立のために「競争」ではなく「連帯」しよう！

JR東労組は、安全とチームワークを守るために、過度な競争を持ち込むことに反対です。しかし、1月16日には山手線と京浜東北線が停電で8時間以上運休、30日には上野駅での停電で常磐快速線が約7時間運休、2月2日には京葉線八丁堀駅でのエスカレーター火災で約3時間の運転見合わせが発生しています。

2月3日、国土交通省は副社長を呼び、再発防止を指示しました。関東運輸局から警告文書が出され、マスコミからも「本業である鉄道事業に集中すべき」と指摘される中、安全再確立に専念するためには、「評価」への不安がない賃金水準へと高めることが重要です。

2026JR総連春闘は、バス東北本部、バス関東本部、ステーションサービス協議会の仲間との連帯はもちろん、JR総連や加盟各単組の仲間たち、そして厳しい経営環境にいる労連の仲間たちと連帯・共闘し、「統一要求・統一闘争」でたたかっていきます。

ハラスメントや不当労働行為は断じて許さない！

「被害者が加害者にされた！・JR東日本武蔵小金井駅暴行事件」や、不当労働行為をめぐる「損害賠償請求」救済申立」など、全国でのたたかいに敬意を表し、引き続きたたかっていきましょう。

ところが、バス関東では一部管理者からのパワハラが繰り返され、帰宅時に涙があふれて心の糸が切れ、病気休職となりました。また、秋田地本管内では過半数代表者選出を意識して社員との懇親の場を持つことを促すメールが送信され、添付された社員名簿には組合員を含む一部の社員に取り消し線が引かれていました。これらは断じて許されることではありません！

時代認識を持ち、組織強化・拡大のうねりをつくり出そう！

自民党が台頭する中、台湾有事をめぐる首相答弁を撤回せず、対中関係の悪化を受け止めず、旧統一教会と自民党の癒着問題や裏金問題を覆い隠し、防衛費を引き上げ、武器輸出の解禁や非核三原則の廃止、核武装にも言及しました。さらに、スパイ防止法の制定や憲法9条の改悪、緊急事態条項の新設、労働諸法制改悪も危惧されます。改めて、反戦・平和を求め、労働諸法制改悪を許さないことが大切です。

大会以降、31名（当時）の組織拡大を実現してきました。組織強化・拡大のうねりをつくり出しましょう！本日はよろしくお願いします。

主な発言

●安全風土について

JR貨物労組の仲間が入換作業で両足切断の事故、本人とご家族を思うと心が痛む▼バス職場ではタイヤチェーンの取付作業があるが、バスは10tを超える重量であり、命に関わる。これまでも脱着時にタイヤハウスに腕が挟まれることがあり、新規採用者や転勤者に教訓を伝える▼田町駅での停電について、作業中の感電を防ぐ「検電接地装置」の解除に課題があったが、原因究明委員会で明らかになったのは、JR本体の電力社員の多くが「検電接地装置の実物を見たことがない」こと。JR本体は検電器と接地器を取り扱うが、検電接地装置はパートナー会社でしか取り扱わず、JR本体社員は知らないという。類似事象の教訓が活かされなかった。教育の充実等を求める▼職場では「当たり前を超えるという言葉に惑わされず、安全輸送をつくろう」と提起▼企画業務を担わせて「人2～3役が当たり前、「公共交通機関としての自覚」を持てなくさせている▼駅でのカスハラを受け、組合員や未加入者に寄り添い、団体交渉で訴えてきた。氏名札省略やビジネスネームの採用などを求め議論を重ねた結果、ようやくカスハラ発生時の氏名札省略が通達された。団体交渉権のない社友会にはできない▼2月21日に部会で安全集会を開催する。山手貨物線触車死亡事故を語り継ぎ、自らと仲間の命を守る▼踏切で特発冒進の事象、特発が草木に隠れていた。原因究明委員会等で連帯を深める▼異常降雪の中で雪を抱き込み停車、少しバックしてからアタックするという中で、雪に乗り上げて脱線。運行優先であり、「昨日も大丈夫だったから今日も大丈夫」というのは間違ったプロ意識だ。安全は自己保身とのたたかいであり向き合う。

●不当労働行為・ハラスメントについて

自ら受けた不当労働行為と、それに抗するたたかいを自分の言葉で語っている。職場では、異動にあたって呼び出された組合員が「本社には組合員はいない」と言われる。会社は被害者への聞き取りと管理者への確認をしているが、第三者機関の活用などの積み上げが大きい。会社の目を気にせず組合に加入活動できる職場をつくる▼統括センターで「代表者選挙も近づいて来ましたので関わりを強めてください。社員一人につき最低1回はお願いします。支払は副所長がします」との会社メールが配信。添付名簿には組合員などに取り消し線が引かれ、メールが届いた社員は「驚愕して震えた」という。過半数代表者選挙に向けた買収と言わざるを得ず、事実確認を求めて緊急申し入れ。「法令順守は？」「普通の選挙だったらアウトでは？」「やっぱりか」との声。おかしいことをおかしいと言える「安心」でJR東労組に所属できる職場にする▼出張時の懇親会で自ら受けた不当労働行為を上司に報告。「自らが不当労働行為を受けたらどうするか」を議論しており、団体交渉任せにするのではなく、事象発生時はすぐ職場集会を行うなど、職場であり、それをベアと呼ぶべきではない！▼一番賃金が必要な時期である35歳頃から賃金カーブが寝てしまう。この会社に公平な評価が本当にできるのか。社長からの通知は「ベアを出すつもりがない」と捉えられる。企画業務や兼務で疲弊、年休が入らず旅行のキャンセル料5万円を払った人もいる。怒りをもとに踏み込む▼人事・賃金制度の見直しで、どのようなことが「評価」されるのか不明。「上を目指さないと期末手当は上がらないぞ」と言わんばかりの姿勢だが、〝当たり前を超える〟社員還元が必要だ▼昨年のベアは要求額に届かず。世間相場以上の賃上げをかちとるため、職場のリアルな声をぶつける▼レールとバス、一体となって満額獲得をめざす▼一人勤務駅やサポートコール駅が増加する中、輸送障害や旅客トラブルに追われる。運賃改定やダイヤ改正、営業制度改正もあり、苦労を春闘交渉で訴える▼グループ会社の給与は少ない。試験に受からなければ一定の在級年数経過で定期昇給が半額となる制度は大きな問題であり、全力でたたかう。

●経営姿勢・要員問題について

地震発生後、酒気帯びで他区所の現場長が指令室に入る事象が発生。分会情報で発信し、団体交渉に高めた。「地震の時のような事象を正せるのはJR東労組しかない」と議論している▼出向者に対し、郵送での資料送付やタブレット端末での返答が求められるが、「JR本体は出向者に不親切だ」との声がある▼ワンマン化が提案され、職場集会で不安を集約し団体交渉に高めた。「成案になり次第示す」という回答が多く、会社の秘密主義に怒り。混雑駅へのホームドア設置を求めたが会社は聞かず。車掌組合員意見交換会を通じ、中編成ワンマンでの車内秩序維持の観点で乗務を残す要求を提出している▼会社提案資料に誤りが多すぎる。首都圏本部は重大性を認識しているとは思えない▼稼ぐことが第一、安全が第二という姿勢と言わざるを得ない▼職場実態と乖離した施策や、事象を判断できない管理者が増加。間違っているものは間違っていると発信したい▼事業場の単位を事業本部毎とすべきではない旨をJR東労組が一貫して指摘してきたが、経営のパートナーたる社友会は何も指摘していないのではないか。一方で、会社が社友会にだけ購入券制度改正を伝えていたのはおかしい▼労使間窓口数の維持や事業場数の修正回答を引き出したのは大きな成果である。全系統で要員不足の中、職場では、時季変更権乱発で自分の子供の運動会に行けない、欠員のまま勤務発表などがあり、社長の「人は足りている」という発言と食い違っている。設備職場では時間外労働の抑制が全く効かない▼バス職場ではコロナ禍で転職が相次ぎ、新規採用を行うも定着せず退職してしまう。賃金が低い中でドライバー不足につながっている。

●ローカル線について

只見線では沿線の盛り上がりの維持が課題。駅前のカフェで感謝を伝える取り組みや、いつも列車に手を振ってくださる方々へのカレンダーのプレゼントなどを実施。

●平和・政治について

平和研修や安全研修を積み重ねてきた。憲法9条を守るため、反戦平和の運動をつくる▼労働諸法制改悪を許す訳にはいかない▼「自分の人生に直結するから」と政治意識が高まっている。平和と暮らしを守るための候補者を推薦し、それを通じて政党の政策に私たちの意思を反映させよう。

●組織強化・拡大について

「要員不足で休日でも電話がくる」「駅でいじめに遭った」などの悩みを聞きながら対話を積み重ねた。「仲間とより良い職場をつくるためのチーム」がJR東労組だ▼事象に巻き込まれた仲間の日勤期間中に役員が寄り添った「組合をやめた理由は試験に受かること」という相手に対し、JR東労組の必要性を議論してきた。「一緒にたたかいたいから、加入してほしい」と訴えてきた▼レクや団体交渉の報告を積み重ね、仲間が加入した。「自分の意思をしっかり言えるのはJR東労組だ」と思ったという▼ドライバーズ共済会に魅力を感じ、仲間がJR東労組に加入してくれた。自分の意見を気軽に言える、取り組みに来て良かったと思える、未来を任せられると思える運動を積み重ねていく。被災線区復旧に向けた後押しにもなっている。職場と仕事を残す取り組みをしていく。

議事を円滑に進めていただいた議長団
（左から）和田委員（信越地本）、飯田委員（横浜地本）

発言した委員（敬称略）

木村洋、永田泰明（盛岡）
畠山翔、佐藤智哉（秋田）
湯ノ目勝、今野尊人（仙台）
後藤健一（水戸）
長谷理生、佐々木誠（千葉）
山崎昭仁（東京）
川﨑一弘、椀田優一（横浜）
小宮山直樹（八王子）
唐紙将、矢口昌広、佐藤行人（大宮）
奥山直樹（信越）
鴨志田淳（営業）
齊藤誠（工務）
山本政広（かんり）

総括答弁（要旨）

書記長　高橋　孝一

組織強化・拡大について

第44回定期大会で学びあった教訓をもとに「組織の一体感」をつくり出して実践し、大会以降今日まで、31名（当時）の拡大を実現してきました。

リーダーづくりを通じた組織づくりが教訓であり、組織的な課題となっていると感じました。提起した後の点検は組織の共通の課題であり、実践過程における転換点を明確にして、次なるたたかいに向けて、再構成していく議論を共につくり出していきたいと思います。

発生している事故・事象は様々ですが、私たちは「安全第一」「現場第一」を対峙し、是々非々の姿勢で立ち向かっていかなければなりません。施策やローカル線と地域連携だけでなく、未加入者との関係づくりにも拘り、「組合員と共に」1万名組織の実現に向け、全ての闘いを組織強化・拡大に結実するたたかいをつくり出していきます。

今春闘は、4月1日から人事・賃金制度の見直しが見据えられている中、経験の無い異例の春闘となっています。このような状況の中、労使交渉に入っていかざるを得ません。

2026JR総連春闘勝利に向けたたたかいについて

2026JR総連春闘3つのスローガンをもとに、JRバス東北本部・JRバス関東本部・ステーションサービス協議会の仲間と共に、JR総連に結集する仲間と共に「統一要求・統一闘争」で、「連帯・共闘」をさらに高め、労連の中間との連帯強化をつくり出し、たたかい抜いていきます。

今春闘は、4月1日から人事・賃金制度の見直しが見据えられている中、経験の無い異例の春闘となっています。このような状況の中、労使交渉に入っていかざるを得ません。

定期昇給の要求については、現行の定期昇給額の水準を維持した昇給を実施することを求め、能力昇給反対のスタンスを明確にしていくこととします。如何に組合員の賃金カーブを維持・向上させていくか、昇給額に一律定額の加算を求める議論などの構えをつくり本部は交渉に臨んでいきます。

今定中以降、次なるたたかいに決起するために節目をつける議論をおこない、26春闘のたたかいと掲げた要求の視点で、検証運動に転換する意思統一を図っていくことも課題であります。組合運動として施策や制度見直しに対する運動をやりきるということを、各地方委員会でも議論していただきたいと思います。

また、夏季手当については3・2ヶ月、新制度移行に伴う変動要素を加味して、一律5万円の支給を求めていきます。要求を下げる理由はないことから、昨年の要求額水準をベースに、変動要素分は定額とし要求水準をあげて要求していきます。

JR東日本第3四半期決算を見ても、支払い能力は十分にあります。決算発表日の2日付、社長名で委員長宛てに示された「通知」に現れている通り、4月からの制度改正で一万円上がるのでベアや手当を抑制するかのような姿勢を断固認めるわけにはいきません！ここ数年の早期回答の春闘破壊に対する危機感も高めていかなければなりません。

春闘は、職場からつくり出した交渉力・組織力を武器にたたかいをつくり出すものであり、「賃金は闘い取るもの！」ということを大前提にたたかい、2026JR総連春闘の勝利をめざしていきます。

安全第一で安心して働ける健全な会社をつくり出すたたかい

いまJR東日本の安全は、2カ月で2度の「警告文書」が出される非常事態です。

貨物労組組合員の痛ましい事故を受けての発言がありました。日ごろの組合員との対話や作業実態や環境の把握、事故・事象発生時の初動と原因究明のたたかいをつくり出すことが、この痛ましい事故から学ぶという事ではないでしょうか。事故発生後すぐに議論する場をつくった初動の教訓、原因究明委員会の議論から意識の転換を図ってきたと教訓的な発言がありました。本部としても具体的に安全セミナーを通じた安全議論の展開を構想していきます。

人事・賃金制度の交渉でも60歳原則出向に反対して議論してきました。この間、出向組合員が退職を余儀なくされている現実をみると、このままでは会社の言う長く働いてもらう制度とは真逆の、退職に追い込まれる制度になってしまうという危機感を持ちます。出向問題は全組合員の問題であるとあらためて認識し、組織議論と労使議論を強化していかなければなりません。あらゆる組織破壊攻撃にも屈せず議論を行っていきたいと思います。

安全で健全なJR東日本グループをつくり出すために、不当・不法行為とあらゆる妨害を許さず「職場からの挑戦」でたたかいを強化していかなければなりません。

あらためて「抵抗とヒューマニズム」を根底に、今日の定期中央委員会の成功を糧に、リーダーが一歩前に出て、担い手づくりを通じたJR東労組運動の強化・拡大、過半数代表選挙勝利！2026JR総連春闘勝利に向けて決起することを参加者全員で確認し、総括答弁とします。

ご来賓の皆さま

JR総連	執行委員長	山口浩治様
	執行副委員長	佐藤英樹様
	広報部長	池尻和寛様
JR東労組OB会		
	会長	奥山光昭様
	事務局長	森　将美様
	事務局次長	遠藤政之様